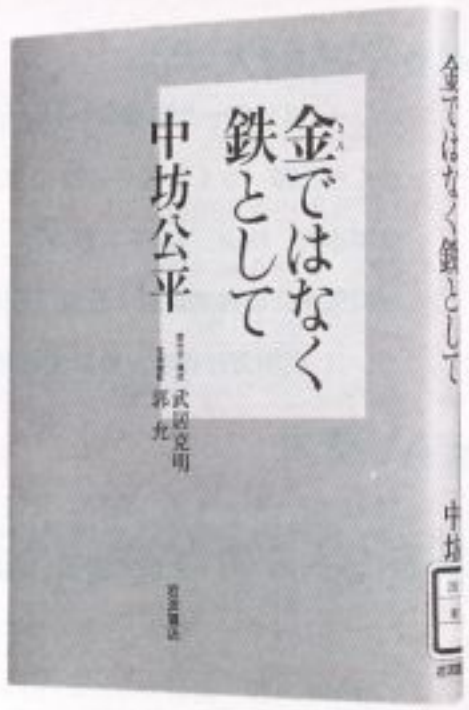
この本を読んだ⑱

『金ではなく鉄として』

中坊公平著

岩波書店　二〇〇二・四



日本弁護士連合会会長や整理回収機構の社長を歴任された中坊公平氏の自伝。

「私は出来の悪い子だった」で第一章は始まる。両親が元教師だったので、「少し勉強などを見てやれば」と担任が言うと、本質的に「金」でないものにメッキをしてもすぐはがれ、そのときが本人にとっての悲劇なのだから鉄は鉄としてもがきながら生き方を探したほうがよいと父親は語ったという。

「虚弱で運動もダメで友達とも遊べず、勉強ができないうえに、基本的な生活ができない」少年時代は、自分付きのお手伝いさんのいる裕福な家庭で甘やかされてのんきに過ごしたが、中学入試に失敗してからは、ひがみや劣等感にさいなまれ、人目を避けて通学する日々をおくる。そのうち学徒動員。ここでは過酷な状況にかかわらず、思いがけず「生き残る」。しかし、その後の高校受験に失敗。敗戦後の家庭の事情もあり、農業に従事する。鬱屈しながらも農業で生きていけそうと思ったとき身体を壊し、農業も断念。このあと全く幸運な「めぐりあわせ」で京都大学に合格。何度かの司法試験を経て苦労の末弁護士となるが今度は高給をいいことに放蕩の日々。結婚を機に独立するがお客は来ず、窮地に陥っていたときに、そのころ依頼された何件かの仕事を解決しながら、本当に鉄が鍛えられていくように弁護士として成功していく。

物語は中坊氏44歳の「森永ヒ素ミルク中毒事件裁判」で終わっている。すでに地位も財産も築き上げた時期、左翼嫌いの父親をだしに依頼を断ることを思いついたが、「子供に対する犯罪に右も左もない」との父親の言葉で国と森永を相手の訴訟に参加。被害者家族を訪問して惨状を目のあたりにし、ハイペースの裁判をこなし、遊離しかけた被害者団体と弁護団と説得するという困難な仕事を命懸けでやり終える。中坊氏は「自分の「原点」を模索するのが青春であるなら「森永裁判」は私の青春だった」と振り返る。

けんか相手に噛み付き、たたかれても離さなかった少年期の弱者としての必死の抵抗について「自分は正義の人と思われているかもしれない」が、巨大権力との苦しい戦いを続けた根底には「あのころの体験があるように思う」という。京大時代は、母親が「あなたには年賀状が一枚も来ない」とため息をつくような孤独な生活だったが、卒業後、下宿や弁護士事務所で次々と生涯の友人を得ることになる。「もしかして、独りこもってきた長く暗い道のりこそ、私の目を光にかんじやすくしたのか。」と中坊氏は書いている。

遅い青春までの物語にいろいろな「めぐりあわせ」を教えられる。　（池内みさを）〈289.1—N31〉

レファレンス通信

相互貸借（Inter Library Loan）サービスについて

当館で所蔵していない本を、他大学図書館、公共図書館、国会図書館などから、郵送で取り寄せ、利用することが出来るサービスです。3階参考カウンターが窓口になっています。だいたい1週間程度で届き、2·3週間利用することが出来ます。

ほとんどの図書館が図書館間の貸出サービスを行っていますが、私立大学には貸出を行わない大学や貸し出す地域·館種を限定している図書館もあります。また、雑誌は借りることができませんので、記事単位でのコピーの取り寄せとなります。その他、書店で容易に入手できるような新刊本は対象となりませんので購入申込み制度などをご利用下さい。

なお、求める資料をどの図書館が所蔵しているかは、図書館員が調べますが、大学図書館については、国立情報学研究所のNACSIS Webcat を使って直接確認することも出来ます（但し、蔵書の登録状況はその図書館によって異なります。当館でも、和書は1990年以降に受け入れた図書のみ登録しています）。道立図書館、市立図書館も昨年の12月からインターネットで蔵書検索が出来るようになっています。

また、国会図書館の近代デジタルライブラリーのように、今まで借りることが出来なかった明治時代の貴重な図書が電子化され、自分のパソコンで見ることが可能な場合もあります。

当館は、教職員、学生のみなさんの必要とする資料の収集に努めていますが、情報量の増大、ニーズの多様化に伴い1つの図書館ではやはり限界があります。必要な資料が札大にない場合には、その資料がどこにあるかを探し出し、貸借などで入手する体制をととのえています。　（渡部　毅）